



キュレーションとしてのクリエイション : ジョセフ・コスースの作品群を中心に

植松, 篤

(Citation)

美学芸術学論集, 3:71-73

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002326>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002326>



【修士論文要旨】

キュレーションとしてのクリエーション—ジョセフ・コーススの作品群を中心に

植松 篤

ジョセフ・コースス(Joseph Kosuth, 1945-)は、コンセプチュアル・アートの先駆的存在として重要な位置を占めており、その作品の解釈に関して今までにも様々な論があった。コーススに影響を与えた芸術家との関連や、彼が敵対した批評家との関連、あるいは彼の作品の自己言及的な性質についてならば、すでに先行研究がある。しかし、それらは初期の活動に関するものが多く、近作についてはあまり述べられていない。本論文では、今まで語られることの少なかった、ジョセフ・コーススの近作の中から、表現形式としてキュレーションを用いたものを取り上げた(以下キュレーション・アートと呼ぶ)。彼はミュージアムにおいてキュレーションを行い、それを芸術作品として位置づけた。この種の作品の一つについて、美術史家のデビッド・フリードバーグ(David Freedberg)は、作品の政治的背景からコーススの芸術理論まで幅広く論じている。しかし、キュレーションというミュージアムの実践を芸術とするならば、鑑賞者が会場全体をどのように鑑賞するか考察することが、作品解釈のために重要なのではないか。なぜなら、伝統的絵画ならばその画面が読み取るべき対象であるように、キュレーション・アートはその展示空間が読み取るべき対象であるからである。従って、本論では鑑賞という点に立脚して、作品を分析した。

第1章では、キュレーション・アートが持つ芸術作品の特徴を、他のミュージアムを主題とする芸術作品の中に位置づける。そもそも、ミュージアムを主題とする芸術作品は、時に「ミュージアミズム」と括られるほど、20世紀においてはよく見られるものである。まず1節において、この傾向を、その特徴をもとに、ミュージアムから逸脱する反ミュージアムの傾向と、ミュージアムの何らかの機能や側面を模倣する擬ミュージアムの傾向の二つに分けた。さらに後者を、それが模倣するミュージアムの側面から分類した。諸作品は複数の要素が絡み合っており、完全に分けるということ是不可能的だが、便宜的に「集積」、「展示」、「アーカイヴ」の三つのカテゴリーに分けた。キュレーション・アートもこれらと関連を持つものである。しかし、キュレーション・アートはミュージアムを模倣するというよりも、ミュージアムの機能の一つそのもの、すなわち、実際にコレクションを用いた実践なのである。そして2節において、芸術家によるキュレーションが持つ一般的な傾向を捉えた。美術館が芸術家をキュレーターとして招くという試みは以前からあるが、芸術家によるキュレーションが最も盛んに行われたのが90年前後の時期となる。これらのキュレーションに特徴的なのは、資料としての、あるいは芸術としての価値が低いものとされ、いままで展示されてこなかったものを取り上げることや、展示に際しての作品の意外な並置である。キュレーション・アートもまた、このような試みに連なるものであり、上記の特徴を共有することが多い。ただし、本論ではキュレーションが作品であるかどうかについて定義することには積極的な意味を見出さない。本論は個々のキュレーション・アートの持つ特徴に言及することを意図した。

第2章においては、キュレーション・アートの性質を明らかにする手がかりを得るため

に、展示空間・鑑賞者・作品それぞれの間の関連について言及した。1節では芸術作品がミュージアムにおいて、どのように鑑賞されてきたかを論じた。従来、鑑賞者は芸術作品に没入して鑑賞するように導かれていた。そのような鑑賞を最も強く支えるのが、多くの近代美術館で見られるホワイト・キューブである。ホワイト・キューブにおいては、壁は白く塗られ、光源は天井にあり、床はフローリングであるか、もしくは足音がたたないように絨毯がひかれている。そして、鑑賞者が作品を一つずつ眺めることができるように、作品は等間隔に置かれている。これらの要素によって、鑑賞者は展示空間を意識することなく、作品に没入することができる。このような鑑賞においては、ブライアン・オドハティ(Brian O'Doherty, 1969-1976)が論じたように、ある矛盾が生じる。すなわち、鑑賞者は、その身体性が排除されながらも見る主体として要求される。この時、鑑賞者は、その身体性が括弧入れされ、制限された身体しか有しない。言い換えるなら、それは目だけの身体である。

しかし、上記のような鑑賞の枠組みでは当てはまらない芸術作品が現在では現れており、その場合の身体性を2節で論じた。現在の視点から見れば、インスタレーション・アートやインタラクティブ・アートなど鑑賞者の身体と関わる芸術は存在する。では、現在では鑑賞者は身体を取り戻したといえるのだろうか。結論としては、そのような芸術においても、鑑賞者は限定的にしか身体性を取り戻していないと言える。そのことを、本論ではミニマル・アートから辿って論じた。前述のような没入的な鑑賞は、ミニマル・アートにおいて最も決定的に変化したと言える。ミニマル・アートはマイケル・フリード(Michael Fried, 1939-)が述べたように、鑑賞者が作品の内容を読み取ることができないものである。そのため、鑑賞者は、その作品を自分と同じ空間に存在する他者のような存在として認識する。フリードは、ミニマル・アートにおけるこのような鑑賞者と作品の関係を「演劇性」と呼び、批判を行った。このような鑑賞は、それ以前の立体作品に対するものとも決定的に違うものである。しかし、ノーマン・ブライソン(Norman Bryson)が述べるように、ミニマル・アートの鑑賞経験においても、鑑賞者の身体は、多かれ少なかれ美的な水準でのみ許されたものである。すなわち、ミュージアムなどにおいて鑑賞者は作品の「美的な対応者」としてあるに過ぎない。インスタレーション・アートにおいても、一見身体性が回復されたように見えるが、その身体も、やはりミュージアムにおいてある制限を持って許された身体と言える。したがって、キュレーション・アートがインスタレーションである以上、鑑賞という点から作品を論じるためには、制限された身体という条件を踏まえなければならない。

第3章においては、ジョセフ・コーススのキュレーション・アートをフレッド・ウィルソン(Fred Wilson, 1954-)のそれと比較した。1節では、そのための前段階として、コーススの作品の解釈について、従来の解釈の問題点を指摘し、インスタレーションとして解釈すべきであることを示した。すなわち、コーススの作品は、以前はルーシー・リパード(Lucy R. Lippard, 1937-)が提唱した「脱物質化」という観点や、芸術の自己言及性という観点から語られることが多かった。あるいはベンジャミン・ブクロー(Benjamin H. D. Buchloh)はコーススの作品を、レディメイドの系譜から論じた。しかし、それによって見逃されているのはコーススが作品をどのようにプレゼンテーションしたかという点である。コーススの解釈にとって、展示という側面が重要であると、筆者は考える。したがって、このこ

とと第2章で述べたことをあわせ、コーススの作品を論じる方法として、鑑賞という観点が重要であるといえることができる。

以上に基づき、2節においてコーススのキュレーション・アートの作品を分析した。コーススのキュレーションには、一般的なそれと違い、テキストや作品の設置に独自の要素が見られる。すなわち、作品を密集させる展示方法や、テキストを展示空間全体に散りばめるといったことである。その結果、コーススのキュレーション・アートはレディメイドとして用いられた作品へ鑑賞者が没入することを妨げる。それにより、鑑賞者は鑑賞経験を意識するよう促がされるのである。

そして、コーススの特徴を浮かび上がらせるために、3節においてコーススとウィルソンの作品を分析し、両者を比較した。ウィルソンは、コレクションを用いてキュレーションを行うという点では、コーススと同様な作品を制作している。ミューゼオロジーへの関心という点でも二人は共通していると言える。しかし、ウィルソンはそのキュレーション・アートにおいて鑑賞行為自体を前景化するようなことをしていない。ウィルソンは、用いた作品を、それらがまるで対話をしているように並置させた。それによって、鑑賞者は鑑賞行為自体よりも、その対話へ意識を集中させるのである。

従って、結論としてコーススの作品は鑑賞ということへの独自のアプローチを持っていると言える。キュレーション・アートの鑑賞には、展示に使われた作品に対する鑑賞とインスタレーション全体に対するその2種類がある。第3章で明らかになった鑑賞の阻害というコーススに特徴的な仕掛けによって、コーススはこの2つの間を鑑賞者に行き来させ、鑑賞という行為を前景化したのである。

(※本稿は2007年1月16日に提出した修士論文の内容を要約したものである。)

(うえまつあつし：神戸大学文学研究科修士課程)